

総合演劇雑誌

テアトロ

1
2022

創刊1000号記念 懸賞劇評募集！

第35回テアトロ新人戯曲賞募集！

特集【列島演劇だより】

神澤和明／菊川徳之助／はせひろいち
鈴木美恵子／遠州まさき

【批評的エッセイ】渡辺 保

●連載 いまを生きる⑨ 坂手洋二／旅する演出家③⑤ 流山児 祥
共創する空間へ② 西堂行人

【エッセイ】岡田正子／〔追悼〕渡辺淳さん

今月選んだベストスリー 329 河野 孝

◆戯曲◆

滅びんかな、滅びんかな
江原吉博

サワ氏の仕業
はせ ひろいち



11月の 関西

古典の改作、批評性に滑稽味

清流劇場「弱虫オレステス」

兵庫県立ピッコロ劇団「いらないものだけ手に入る」
エイチエムピー・シアターカンパニー「マクベス 釜と剣」
南河内万歳一座「ギャンブルの犬」

九鬼葉子

清流劇場が「弱虫オレステス」を上演（10月16日、大阪市の一心寺シアター倶楽で所見、エウリピデス原作、丹下和彦翻訳・補綴・ドラマトゥルク、田中孝弥構成・演出）。古代ギリシア悲劇を、全編大阪弁で上演した。

トロイア戦争から帰国したアガメムノンを殺害した、妻のクリュタイメストラ（日永貴子）。娘を生贄にした夫を許せなかったものだが、息子のオレステス（北野秀気）は、姉・エレクトラ（永津真奈）の協力を得て母を殺害、父の仇を取る。だが罪の意識から病に伏せる。民会から死刑判決を下された

オレステスは、叔父に救済を求めるが拒絶され、叔父の娘・ヘルミオネ（たちばなゆひ）を人質に館に立て籠る。

大義に翻弄されるオレステスの哀れさや、自分だけ助かろうとする縁者達の卑小さを、大阪弁で滑稽味を強調し、表現。特にヘレネ役の木全晶子。トロイア戦争の原因となった絶世の美女で、華やかな衣装とメイクで登場するが、喋り始めると、吉本新喜劇の未成映薫かと思わせるほどの、大胆なコメディエンヌぶり。自己を正当化する「あかんだれ」の造形が、共感の笑いを誘った。多少違和感を覚えたのは、冒頭の

エレクトラの長台詞。良家の子女の使う大阪弁とは異なっていた点。また悲しい運命を語るには、馴れさが勝ちすぎた。方言を台詞として有効活用するには、言葉の孕む陰影や、生活環境の反映など、さらに洗練させる方法もある。今後に期待したい。

新たな場面が加筆された。原作はアポロンが登場し、オレステスの命が救われ、一見解決を見たかのように終わるが、実は本質的な解決になっていない。オレステスの魂は救済されないまま。加筆場面では、彼が自力で運命を切り開く宣言をする。ただし、妻と

critic

なったヘルミオネに完全に主導権を奪われている様が、現代的。

舞台中央に八百屋舞台が組まれ、回転し、角度を変える。背景には、アルゴスの町から出土した土器の絵柄が描かれた。死者を埋葬する女性達の姿がデザインされたものだ。戦争は国の威信のため、というのは、お題目に過ぎない。トロイア戦争も、もとを正せば王妃・ヘレネの不倫が原因。ただ今回、ヘレネを身近な「あかんだれ」に造形したことで、敵役ではなく、むしろ自分と同種の人間に思えた。争いの種は、実は自分も内包していることに気づかされた。